

九月興行

下私舞の海



波の橋餅  
交際亭

伊勢音頭懸及・古竹堂古油屋の段  
此處橋下・太郎太夫相勤申

月

# 大和運動



## 人の和で築け明るい 大東亞

皆様只今大和運動が行はれて居  
ります

お互に大和の心で親切を盡し合  
ひ感謝を仕合ひ日々の生活を明朗  
愉快にいたしましょう

一、一億眞に和を以て皇國に歸一  
しましょう

一、銃後一億一切の相剋摩擦を解  
消しましょう

一、互に禮を厚くし親切を盡し合  
ひ感謝を仕合ひ「賣手も買手  
もありがたう」の精神を徹底  
的に現しましょう

一、街に家庭に職場に和の精神を  
盛り上げ生活を明朗愉快にし  
ましょう

一、闇取引は和の精神を掻き亂し  
ます。絶対之を排撃しましよ  
う

# 乍憚口上

秋もやう／＼酣と相成り朝夕はまことに凌ぎよく皆々様には愈々御健勝に遊ばされ候段恭悦奉申上候

偕而永らく巡業にて當座を休演致居候人形淨瑠璃連中は茲に觀劇季節を迎ふると共に一同勇躍歸阪仕り太夫三味線人形顔ぞろひを以て久々總出演初秋興行の運びと相成申候段偏に御眞様方の御賜ものと厚く御禮申上候就ては此度一層緊張郷土藝術の使命達成に努力仕りお珍らしき狂言を取揃へ殊には人形淨瑠璃としては曾つて上演されたる事なき新作曲をも試みて一座役々に適當なる箴り役を以て懸命に相勤め可申候間何卒相變らせられず古典御愛護の意味を以て御引立御來場の程を偏へに御願奉申上候

昭和十七年九月十日

四ツ橋 呼

文 樂 座 敬白

昭和十七年九月十日初日

初日 午後 三時開演

平日 午後 三時半開演

・御觀覽料。

一等席 御一名 金三圓五十錢

(二階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

一等御座席(一等椅子席)は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 專用電話 南⑦四七壹壹番

一般御用 の電話 南⑦三〇三二番  
南⑦三七八八番

お草履の準備は御座ぬますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ぬます。



# 九 月 人 形 淨 瑠 璃

太夫・三味線・人形總演出

九 月 十 日 初 日

初 日 午 後 三 時 開 演

每 日 午 後 三 時 半 開 演

第一 菅原傳授手習鑑

車車喧訴櫻  
先場嘩訟丸  
ののののの  
段段段段段

第二 増補大江山

辰橋の段

第三 伊勢音頭戀寢刃

古市油屋の段

第四 士屋主稅

向島共角住家の段  
土屋主稅廠の段

西亭作詞並作曲  
大塚克三舞臺裝置





梗概

菅亟相の舍人梅王丸は、主君亟相が筑紫へ流罪になつてから、御行方不明の御臺所を尋ね所々を漂白し、或ひは筑紫の配所へ主君を尋ねても見様かと丁度吉田社の邊りを通りかゝつた所である。

ふと出會つたのは弟の櫻丸、久し振りでの對面を喜んだ。聞いてみれば櫻丸は、齊世の君と菅亟相の息女刈屋姫との戀の取りもちをしたばかりに事大事に及び、時平に宮御謀叛など、云ふ讒言をされ、そのため主君亟相は、流罪と云ふことになつた。これと云ふのも皆おのれのなす業と、切腹まで思ひつめて居るのだが、今年七十になる親白太夫の賀の祝に心ひかされ、今日まで面目なくも生きながらへて居るのだ、と語るのだつた。

折柄、本院の左大臣時平公吉田への御參籠とあつて、隨身青侍を前後に大路も狹しと、乗物を軋らせて來たのであつた。兄弟は主君の敵の時平に思ふ存分恨みを晴さうと、その牛車の前に立ち塞

杉王丸  
豊竹本呂賀太夫  
鶴澤清尾太夫  
豊澤新左衛門八

人形役割割

舍人松丸  
舍人梅丸  
舍人櫻丸  
時平王丸  
仕丁公丸  
喧嘩の段  
竹本七五三太夫  
鶴澤綱造  
吉田玉造  
吉田兵吉造  
吉田小玉  
吉田兵吉造  
桐竹紋司  
大桐竹紋之十  
桐竹紋之十  
桐竹紋之十  
松助郎德造

人形役割割

舍人松丸  
舍人梅丸  
舍人千代丸  
舍人王丸  
桐竹紋司  
吉田玉造  
吉田兵吉造  
吉田小玉  
吉田兵吉造  
桐竹紋司

訴訟の段

竹本春太夫  
鶴澤友造

人形役割割

女舎女舎女親  
房人房人房  
は梅千松八白  
王王太  
る丸代丸重夫  
桐吉吉吉吉吉  
竹田田田田田  
紋玉小光玉  
司徳吉造助市

櫻丸切腹の段

竹本大隅太夫  
鶴澤清二郎

人形役割割

女舎親女舎  
房人房人  
は梅白八櫻  
王太  
る丸夫重丸  
桐吉吉吉桐  
竹田田田竹  
紋光紋  
之十  
司徳市助郎

がつた。

主人の威を笠に罵り立てる供のものたちを投げ退け、時平に迫らうとすると、その中に三人兄弟の中の松王丸が居た。松王は早くから時平公に仕へ、今では兄弟と敵味方になつて居るのだ。松王は兄弟と一つ心でない忠義の働きお目にかげんと時平の車を押出さうとして二人と争つた。それを猶もやらぬと押戻す兄弟、と見る間に、車の内が揺らいで、御簾も節も踏折り赫々たる面色で現はれたのは時平の大臣であつた。時平は聲あらゝかに、轍にかけて轢殺せ、と轍をもつて打ちかゝつて来る兄弟を睨んだ。その眼光のもの凄さに、遺の梅王、櫻丸もたち／＼と五體のすくむ思ひで、無念々々と齒嚙みをするばかり、松王は、これを見て我が君の御威勢見たか、猶手むかひせば御目通りで只一と打ち、と刀の柄へ手をかけるのを、大臣は止めて、血を流すは社參の穢れ、助け難い奴なれど松王が忠義に免じ助けてくれる、と嘯く



ので、それに従ひ松王は、よい兄弟を持つて命拾ひをした禮を云へと罵つた。梅王、櫻丸はくわつとせき上げ、言ひ分はあるが、親人の七十の賀の祝儀が濟むまで助けて置く、と互に意趣を残して立ち別れるのであつた。

この三人兄弟の父親は、四郎九郎と云つて、菅巫相の領地佐太村に古くから住んで居て、人にも律義一遍の老爺として知られて居た。巫相の下屋敷の庭には、公の御愛樹の梅松櫻があつたが、これの世話や庭掃除を承り、至つて氣樂な年寄仕事にその日を送つて居たのだ。

今日は四郎九郎の七十の誕生日、賀の祝とて、朝から近所へ餅のくばりものなどして心ばかりの内祝をしたのであつた。それに菅巫相から七十を祝はれて白太夫と云ふ名を頂いたので、今から名を改めることにしたのだ。目出度いと云つてこの老爺の自慢は、七十の長生きばかりではない。珍

らしい三つ子の父親であることだ。その爲め襟裡さまから御扶持まで頂き、かうして安樂に暮して行けるのが近所の者へも鼻が高いのだつた。

今朝近所の十作に配つた祝ひの餅には、酒を添へるかはりにと、茶釜で酒をうつてあつたのも、もの堅い白太夫のしるしだつた。

今日はめでたい三つ子の兄弟が此處へ集まることになつて居た。一番先きに顔を見せたのは、櫻丸の女房の八重だつた。續いて梅王丸の女房の春と、松王の女房の千代が、來る道々今日の馳走にと、嫁菜やたんぼなど春の草を摘みながら來るのも、のどかなけしきだつた。

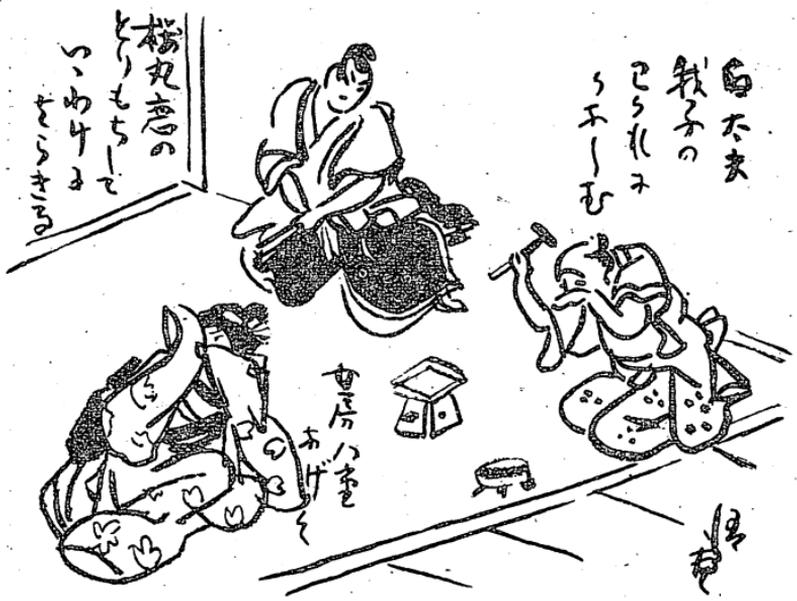
三人集つた嫁同志仲も睦しげに、あれこれと料理をはじめると、白太夫は嬉しげに見て居た。が、氣にかゝるのは俵たちが未だ來ないことだつた。噂に聞けば先日、時平公の車先きで兄弟三人の大喧嘩、一度に生れた兄弟ながら、心は別々なのが白太夫には物足らなかつた。

女房たちも良人の來るのが遅いので、氣を揉むのだつたが、時刻がうつると白太夫は、庭の梅松櫻を兄弟になぞへて、これに膳を据えさせ、その前で子供に云ふ様祝儀を述べた。

八重は新らしい三寶土器、春は梅松櫻を描いた三本の扇、千代は白太夫の頭巾、とそれ〴〵心を盡した祝物を舅に贈るので、白太夫も大喜びで、兄弟たちが來るまでと、八重を連れて氏神詣でに出かけるのだつた。

その後へぬつと入つて來たのは松王だ。梅王も櫻丸も主無しの扶持はなれ、用も無いのに何故遅いと、憎々しげに云つて居る所へ、梅王が急いで來た。

この間の意趣と云ひ、又もあてこすりや悪口が始まるので、短慮な松王は聞流さず、兄弟揃みあひの喧嘩になつてしまつた。その拍子にぼつきり折れた庭の櫻の立木、これがめでたからざること



の前兆とは、後になつて知れたことだつた。

其處へ歸つて來た白太夫は、櫻の折れたのも、誰の仕業と咎めもせず、呵る所をしからぬ心の底には何か曰くがありさうだつた。

今日の祝儀を述べた梅王、松王は、各々懐中から何やら願ひ、と一通を父親の前に差出すのであつた。それは、梅王は筑紫へ下つて菅亟相に奉公したいと云ふ願ひ、松王は何を思つてか勘當を受けたいと云ふ願ひだつた。

白太夫は梅王の願ひは許さない。御行方不明の御臺所、若君を尋ねよ、配所の御奉公はこの白太夫がする、と云ふのだ。松王には、天道に背く不孝者望み叶へとらせると、松王夫婦を追ひ出してしまつた。梅王夫婦も望みが叶へられないので詮方なく、あとを八重に頼んで出て行つた。

あとに一人残つた八重は、未だ來ない夫の櫻丸

を案じて居る所へ、奥の納戸から靜かに愁ひを合  
んで出て來たのは、當の櫻丸だつた。白太夫はし  
ほしほと、小脇差を三寶に乗せ櫻丸の前になほし  
た。八重は又恟り、様子を聞かせてと、たゞ泣き  
出すより他に術は無かつた。

實を云へば、櫻丸は今日朝早くからこの家へ來  
て居たのだ。櫻丸はかねての覺悟の切腹を今日と  
思ひ定め、父親に相談したのだつた。櫻丸が姫君  
と齊世親王の御文使ひをしたのが機縁となり、菅  
家は没落今日の仕儀に及んだ。その申譯けの切腹  
義理堅い親白太夫も、それをよしとしたのであつ  
た。しかし親の身として、少しでも命を延ばして  
やりたい念願には、祝儀に貰つた三本の扇を氏神  
の神前に供へ、命乞の御隨を引いたのだつたが、  
それも仇となつた。歸つてみれば庭の櫻は折れて  
ゐる。白太夫も、もうこれ迄と諦めて腹切り刀を  
我子に與へたのであつた。

この上は、潔い最後を、とその介錯に立つた白

太夫は、刀では無く鉦と撞木を取出した。

打ち鳴らすしどろな鉦の音に、念佛の聲も亂れ  
櫻丸はその中に刃に伏した。夫のあとを追はうと  
する八重を止めたのは、最前からも蔭に隠れて  
様子を伺つて居た梅王夫婦だつた。

白太夫は櫻丸の亡骸や八重のこと迄梅王夫婦に  
詳しく頼み、菅亟相の御跡を慕ひ、筑紫の配所へ  
と旅立ち行くのであつた。

### (床本抄) 櫻丸切腹の段

女房わつと聲を上げ仇なる懸路のお媒介、齊世様の御  
悪名取相様の流され給ふ其の言譯に切る腹なら此八重も  
生きては居られぬ、私は残つて孝行せいと胴窓にもよう  
いはれた、それよりはまだむごい腹切る禮を申せとは、  
それが何の禮どころ無理な事いふ手間でいつしよに死ね  
と、コレ申し女房の願ひ立てたべ、親父様の思案はない  
か、コレ俯いてばかりく御座らず共、よい智恵出して  
下さいませ、夫の命生死は親父様のお詞次第、お前は悲  
しうござりませぬか、親の手づから此三寶腹切刀は何事

ぞと恨つ頼みつ身を投げ伏もだえこがるゝ有様はものぐ  
るはしき風情なり。

もうコレ今が別れかと泣も泣かれぬ夫の覺悟、白太夫  
目をしばたゝき、潔い伴の切腹、介錯は親がする。其刀  
コレ見やれ、と懐から取出すは願ひ込んだる鉦撞木、コ  
レ此刀で介錯すれば未來永劫迷はぬ功力、利劍即是彌陀  
號と撞木を取つて打鳴らす鉦もしどろに南無阿彌陀  
南無あみだゝゝ南無阿彌陀ゝゝ念佛の聲と諸共  
に襟押くつるげ、九寸五分弓手の脇へ突き立れば、八重  
が泣く聲打つ鉦も拍子亂れて、南無あみだゝゝゝ  
ゝ右のあばらへ引廻し憚ながら御介錯、オ、介錯と後  
ろへまはり撞木振り上げ、南無阿彌陀佛と打や此世の別  
れの念佛、九寸五分取直し、喉のくさをりを刳切つてかっ  
ぱと伏て息絶たり。

### 文樂座小史（昭和十七年調査）

- 竹本座創立（現今ヨリ二百五十八年以前）  
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）
- 文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）  
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代  
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地濱時代  
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代  
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代  
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代  
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承  
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失  
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代  
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ  
始メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立  
昭和四年十二月以來現在ニ至ル



(床本) 戻り橋の段

人形役割割

渡邊源吾綱 吉田玉助

郎黨右源太 桐竹紋太郎

郎黨左源太 吉田多三郎

扇折若菜 實へ悪鬼 桐竹紋十郎

春雨もいつしか晴てしるくと、月照渡る堀川の、はや瀬の流落ち合うて、水音凄き戻り橋、扱も渡邊の源吾綱戻り橋へ來たりしが、四方はひつそりと静まりて、怪しとみまふ者もなく、むだ足ふみし残念やと、一人つづばやき立居たり、折ふしさつと吹風す、風か有ぬか岸の柳の騒がしく、心ならねばふりかへり、ハテ心得ぬ今吹き風す夜嵐の身にしみんと五體の熱氣、扱は妖魔の仕はざにて、我をおどさん企みよな、いかなる妖魔の術有るともそれを恐るゝ綱にあらず、イデ妖怪を退治して君へ土産に參らせん、イザ來い來れと太刀引きそばめ、木の下蔭へと忍び入る、又村立ちし雨雲の蔭もる月を夜すがにて、たどる大路に人影も火蔭も見えず、我が影を若しや人かと驚きて、被衣に身をば忍ぶ措、けふの細布ならずして女心に胸合はず、思ひ惱みて來りける、ア、今宵の空の定めなく、降らぬ内にと思へども、爰に一條戻り橋、見れば行きかふ人もなし、ア、便りもなやとたゞずみて暫し休らひ居たりける、綱は小蔭を立ち出で、ア、イヤ女性は何れへ參られるぞ、ア、これはくお武家様、



妾は一條の大宮より五條のわたりへ今宵のうち是非参らねばならぬ者、女の身で只一人此の物騒な夜の道、怖い〜と歩むうち、今のあなたのお躰にて、ほんに惻り致しました。ホ、怖いと申すは尤なり、五條のわたりへ参るとあらば、ア、幸いのよき道連れ、五條のあたりへ用事も有らば、某送つて遣はそぶ、コワお情深い其の仰せ、お詞に従ひますればどうぞお連れなされて下さりませ、いざ参らうと打ち連れ立、折しも空の雲晴れて月にあり〜小川の流れ、水に映りし異形の姿、網は目早く今水中に映りし蔭は、エ、ア、イヤ夜更けぬ内に早く〜と、西へ廻りし月の輪に、遠くはなれて愛宕山、北野は近く清瀬の、森は此方とふりかへり、見上る顔にはら〜と、木々の雫も雲運ぶ、又も雨かと立ち休らひ、網は女をいたはりて歩み行く、馴れぬ夜道にてさぞ草臥れし事ならん、イエ〜妾よりあなたこそ、足弱をお連れなされまし

て定めしお草臥れでござりませう、ナニサナニサ最前より見受けし處、ハテ艶かなおことが姿、連れ立つ道に馴れやすく、今は隔ても中空も春の名残とや、都人とは云ひながら、いとも優しき形風俗、いなことをたづぬれども、おん身が父は何人なるぞ、父は五條の扇折、常々舞を好みし故、妾も幼き頃よりして教へを受けしが身の徳にて、此程も或る御所にお宮仕へを致しました、ホ、さも有らん、恥かしながら某は、未だ舞を見たることなし、一トさし舞を見せられまいか、お送り下さる其御禮に、只今御覽に入れますうが、何を申すも途中のこと拙なき技とお叱りは、モ只幾重にもと一禮し、女性は扇借り受けて、會釋をこぼし進み出で、空も霞みて八重一重、櫻狩する諸人が、群つゝ愛へ清水や、初瀬の山に雪と見し、花の散り行く嵐山、惜しむ別れの春過ぎて、夏の初めにおくれにし、花も青葉に衣更へ、木々の翠の美しや、テサテ面白き事なりしぞ、かゝる伎藝のある者を妻に持ちなばよき樂しみ、春の夜道に結ぶ縁、解くか解かぬかおことが心只一ツ、コレサどうかと寄り添へば、女ははつと袖覆ひ、お戯れとは知りながら、嘘にも

嬉しいその仰せ、定めて貴方は奥様をお持ちなされてござりませふ、ア、イヤ、未だ妻はめとらぬが、見らるゝ通りの武骨者、誰れも妻になり人がない、なんのまアない事がござりませふ、まざとしたりそのお顔、お情深きお心に、今宵見へし妾さへ、縁を結ぶ露もがな、思ふ戀路の初螢、云ひ出しかねて胸こがし、若葉の闇に迷ふもの、都女郎は取分けて、姿優しき花菖蒲、引きつ引かれつ澤水に、袖も濡にし事やらん、こなたは尙もうち解けて、それは御身の思ひ違ひ、かゝる名もなき田舎武士、思ひをかける者があらうか、イエ、知つて居ります立派なお名前、ム、何立派な名前とは、當時内裏を守りの役、都へ上りし頼光朝臣の御内にて、渡邊源吾綱どのと、ム、如何致して我が名をば、サア戀しと思ふ殿御故、とくより存じて居ります、戀しく思ふと云ふは偽り、御身が我が名を存ぜしは妖魔の術で有ふがな、ムヲホ、又恠りさそふと思ふて、アノマア眞顔でコレ申し御覽の通り私は若菜、エへ、しら、しくもぬかしたり、汝は心づかざりしが、最前これへ来る道すぢ、月の光に有り、と水に映りし鬼形の姿、なんとハ

、、、媚よき女に化ける共、其本性は悪鬼ならん、ム、サア斯く見ぬきし上からは、其本性を現はすか、サア、君より賜はる此御太刀、髭切丸の利劍の切味、すみやかに降伏さそうか、サア、サア、サア、サア、サア、サア、源の頼光が家臣渡邊の源吾綱が向ふたり、變化の正體現はせよと、柄に手をかけ詰めかけたり、此方の妖女は忽ちに、憤怒の相を現はして、次第々々に變ずる姿、眼いからし大音聲、我は愛宕の山奥に幾年住みし悪鬼也、斯く見現はされし上からは、我が隠れ家へ連れ行きて、引き裂きくれんいざ來いと、云ふより早く飛びかゝり、綱が襟がみむんと掴み、引き立て行かんその有様、ナニこしやくなりとふり放す、又も掴みし強魔の力、此方は動かぬ金剛力、引きつ、引かるゝ時しもあれ一天俄にかき曇り、震動なして四方より黒雲覆ひ重りて砂石を飛す暴風に連れて虚空へ引き上げば、あやしかりける次第なり。

### 集會並に衛生道德

- ◇ 會合は定時刻に始めませう
- ◇ 場内では靜肅に行動いたしませう
- ◇ 會場は互ひに綺麗にいたしませう
- ◇ 場内では禁煙、脱帽を守りませう
- ◇ 會場の設備を大切にいたしませう
- ◇ 傳染性の病人は人の集る所へ出ぬやうにいたしませう
- ◇ 痰唾は痰壺か紙にとりませう
- ◇ 場内の清掃に努めませう
- ◇ 汚水の打ち水はやめませう
- ◇ 道や河や公園などに物を棄てないやうにいたしませう
- ◇ 共同便所は綺麗に使ひませう
- ◇ 人の集る場所では換氣に注意いたしませう



古市油屋の段

中竹本重太夫

豊澤廣助

切豊竹古靱太夫

鶴澤清六

人形役割

女郎お紺桐竹龜松

買の伯母吉田小兵吉

伊勢音頭戀寝刃

古市油屋の段

關根只誠の情死録によると、お紺買の實説としては次ぎの如く書かれてゐる。即ち、志州鳥羽の藩醫佐藤某の二男享次郎、幼年の頃伊勢の御師孫福九大夫の養子となり、名を齋と改め、寛政四年の頃醫術修行に京に學び、同年秋養家へ歸へり、醫を業とせんとした折、或朋友に誘はれて古市町油屋の茶汲女おこんに馴染み、後屢々通ひ末は夫婦と契つた。此時大阪商人井澤文三郎と云ふ者が參宮の途この古市に遊び、おこんの艶色を深く愛し終に大金を以て身請しようとした。これを聞き知つた齋は一途に女の變心を怒り、寛政八年五月四日夜、油屋の亭主清右衛門の母並に下女を殺害し、おこん其他六人に手を負はせ庭口より逃走。後同六日の朝養家に歸へり自刃して果てた。時に齋廿五才、おこん廿四才であつたと云ふ。(仲居の萬のは當時負傷したが治療した結果七十五六才迄存命して天保年間に歿し、おこんも一命を取り留

福岡	貢	吉田榮三
料理人喜助	吉田玉造	
仲居萬野	吉田文五郎	
女郎お鹿	吉田榮三郎	
徳島岩次	桐竹政龜	
藍玉屋北六	吉田玉徳	
小女郎	桐竹紋司	
泊り客	吉田多三郎	
起番	吉田兵次	
仲居	吉田兵二郎	
下女	吉田常次	
女郎	桐竹紋太郎	

めた。

この事件を近松徳叟が脚色して同年——寛政八年八月五月初日（二四五六）から大阪角座にて「伊勢音頭戀寢劍」と題して大當りを取つた。（尤もこれより先き、事件直後、松坂で嵐三五郎一座が「伊勢土産菖蒲刀」として上演し、更に奈河篤助改訂により、七月に京四條南側早雲座で「伊勢土産川崎踊拍子」と題して上演されてゐる。）

後、人形芝居の方では、天保九年七月廿五日（二四九八）初日で、稻荷の文樂座で「一谷嫩軍記」の切として「伊勢音頭戀寢劍」と題して山田案山子の改作により上演されたのが最初で、上中下の三卷（松原の段、十内住家の段、福岡屋敷の段、二見浦の段、古市油屋の段）からなり、その下の巻油屋の切は竹本大隅太夫が語つた。尙、今日行はれてゐる油屋十人斬の本は團平の妻加古千賀女が添作し、團平が節付けしたとも云はれ、（殊に十人斬の邊りの節付けの苦心談は有名である）其節付けの颯爽たる事は斯藝中他に比を見ぬ位だとまで云はれ「其運び方が一種特別の藝力が漂うて居るので決して不

沖屋の段

此知樽下

豊竹古殿大夫

相勤申作

沖屋  
おまん

まの  
まの

福  
ふく

あ



あ

心得な藝人の手に及ぶ物でない」と云はれてゐる。(素人淨瑠璃講釋より)

序で乍ら、劇の動機として扱はれてゐる所謂「青井下阪」或は「青江下阪」と呼ぶ銘刀は、「葵下阪」が正しい呼稱で、これは元越前の國下阪住の康繼と云ふ鍛冶が葵の紋章を刀のなかごに彫る事を許るされ、後に江戸に來て刀を打つ事になり「御紋康繼」とも云はれたもので刀の銘ではないのである。

## 梗概

福岡貢は漸くの事でお家の寶刀青井下阪は手に入れたが、今一つ大事な折紙の詮議に身を打込み馴染みの油屋の抱へ女おこんにも頼んで日夜奔走してゐた。

貢の伯母は一日おこんを尋ね、貢を兼ねて許婚の間柄である紳と添はさねば養子親への義理が立たぬ故、如何か貢の事を思ひ切つて呉れと無理な願ひをするのだつた。

おこんは胸が張りさける許り悲しかつた。それに頼まれてゐる折紙の詮議——さう云へばこの間から泊つてゐる徳島岩次が如何うも怪しい。嫌ではあるが此身を一旦許るし、折紙を取りかへしてから潔く自害して未來の契りを固め様と決心し、その旨を書き残すのであつた。

折柄女中の萬野がおこんを呼びに來た。そして貢とは手を切つて奥の客徳島岩次になびくが身の爲めとしきりにすゝめた。既に覺悟を決めてゐるおこんは、涙かくして萬野のすゝめに従ふのだつた。

其の頃、福岡貢は油屋の店先きに姿を見せた。心にかゝるのはおこんの事、またおこんに頼んだ大事な折紙の詮議のこと……。丁度出會ひ願ひ料理人の喜助が出て來た。喜助は貢だと知ると、四邊を見廻して斯う云つた。……私の親はもと貴方の親御の家來筋で、若旦那様の貴方に忠義を盡せと遺言して歿くなつた。其の大切な貴方様が、而

も福岡様には許婚があり、御養子の御身分で、おこんと浮名を流すなどは……と意見をするのでつた。

貢も意外な話に驚き、喜んだ。そしてその本心を打明けるのだつた。

斯うして何事かをしめし合した貢は、喜助の案内で油屋の暖簾をくゞつた。

しばらくして岩次がそつと出て下阪の刀の刀身をスリ替へたが、窺つてゐた喜助がまたソツと元へ返へした。

岩次の連れの藍玉屋北六や萬野も一座して、おこんは心ならずも岩次と固めの盃を交はさうとしてゐる。

これを見た貢は、今は堪り兼ねて躍り出で、その盃を引つたくり、微塵に投げ付けた。然し不思議やおこんはそれをなじるのだつた。——女の變

心。愛想づかし。その上、悪態の限りをつくす萬野。尙ほ又、身に覺えもないのにお鹿への無心の數々の状まで突きつけられて多勢の中で辱しめられた。

貢は一旦かつとしたが、大事を控へる身の無念を忍んで、喜助が差出す刀を受取り、雨と降る罵言の中を夢中で歸へつて行つた。

後に岩次は、惚れた弱身から、とう／＼おこんに氣を許るし、下阪の折紙を渡したが、さつきすりかへた筈の下阪が、元の刀身に戻つてゐるので大騒ぎとなつた——。

と間もなく貢が途中から急いで引き返へして來た。取り違へた脇差の身が正眞の下阪とも知らない。其處へ萬野が慌てゝ出て來た。そして二人は言ひ争ふ中、鞘ぐるみ萬野の肩を打てば南無三、鞘は破れて血が流れ出た。萬野は救ひを求めた。今は絶對絶命、貢は萬野の肋骨をえぐつた。

血に狂つた貢。青江下阪はよく切れた。

斯うして貢は北六を、お鹿を、女中を、……  
續いて數人を斬り倒した。

おこんは驚いて走り寄つて來た。貢は恨の刃を振り上げた。おこんは刀の下をくゞつて貢に包みを投げ出した。それは苦心して探してゐる折紙ではないか。初めて眞實を知つた貢。然し後悔は遅かつた。

貢は今はと覺悟して刀の柄に手を掛けた折、喜助が急ぎ戻つて來た。すりかへられたと思つた刀は喜助の機轉で眞の下阪ときかされた。今こそ青江下阪と折紙は手に入つた。

跡の事を喜助の俠氣にまかせた貢は、逃げ遅れた怨敵徳島岩次を、一刀の下に斬り殺し、おこん喜助の情を感謝し乍らこの場を逃れて行つた。

(床本抄) 古市油屋の段

後にお紺はうつとりと、暫し思案に暮告る、遠寺の鐘も身にしてみても、心とき付胸の闇、やゝ有て顔を上、折角

思ひ思はれて、二世とかはした貢さん、退ねばならぬ浮世の義理、昨日伯母御様のお詞には、言號の榊様と、祝言をさゝねば、養子親へ義理が立たぬ故、思ひ切つてくれいと、モ事を分けてのお頼み、とは言へ是が何とマア一夜流れのあだ夢も、別れは惜しき、明の鐘炎の中に暮さうか、あなたの退いて片時も、浮世の日影が見られふか、むごい、つれない、胸忿な、別れと言聲を聞てさへ胸にしみる、悲しいと、恨み涙に暮居たる。

しらぬ萬野は聲高に、お紺どの、ア、お紺さん、そこにかいな、そんな事知らずに、一遍と尋ねましたわいな。イヤコレシコレお紺さんへモ今更いふじやないが此間からもすゝめて居るアノ岩次様、大體よいお客ぢやないぞへ、夫れにお前も物好きな、いかに心中立てると、アノかす禰宜の貢づら、アホ、、、お紺様堪忍しておくはないや、ホ、、、モ今も今とてお鹿様が、貢様から度々の無心狀、誠かと思ふて身の皮剥いで打ち込だかもう悔しいと、私への懺悔、コレシコレ此文を見やしゃんせアノ口先で、ちよばくさと、古市中の女郎の油を



流れの身にも誠ある者と思ひ、取交した起請誓紙、まだ其上に大切なイヤサ大事の事まで請合ひながら、わりや夫ぢや。エ、イあだどんな違ひました、アイ性根がくさりましたわいな、モまい〜、まい付かずと早う去で下さんせと、口には云へど心には、ヲ、道理でござんすヲ、道理じやと、云はれぬ此の場の仕宜、血を吐く思ひ押隠す。

萬野は傍へ立寄つて、コレえ貢様、お前はまう喋り仕舞かへ、ヲ、氣の毒やの、コレえ貢様、ちよつとこちらへ御出でなんせ、サア〜早うござんせ、エ、早うおいなんせ、ヤナニ貢様、最前から段々の失禮、サアお腹が立ふ、尤もでござんす、私に免じてどうぞ堪忍して上ておくれなさんせ、ヤコレえ貢様、何はお前がやき〜思はんしても、錢の切目が縁の切れ目じやわいな、アノお紺さんを恨みなさる事は微塵もないぞへ、お前の其素寒貧を恨まんせ、モほんにほんにお前のやうな貧乏神、片時置の家の不吉、サア疾とムお歸り〜、ようお出なさつたへ、エ何、煙草入お忘れたのかへ、ドレ〜、取つて来て上げませう、サア〜お歸り〜、エ、去にやがれと突出す門口、堪へ兼ねて刃の柄、手にかけてなが

ら忠孝の、二字に引かれて喰ひしぼる。チエ、うぬ。何ぢやへ齒を剝出し、そふらひしをひねくつて、何かへ、私を斬る氣かへ、面白い〜、サア〜斬られよう、サ何所から切りなんす。コリヤ萬野おのれはな。サア斬りなんせ。エ、勝手にさらせと道を蹴立て、立ち歸る。

又引返す福岡貢。取違へたる脇差の身に正眞の下阪とも知らず、知らねば氣もそゞろ門の戸引明け内に入りコリヤ喜助〜、萬野は居らぬか、エ、居らぬかと、見廻す折しも遣手の萬野、息もすた〜立ち戻り、顔見合せてヤア貢様、お前もいかに周章たとて腰の物を取違へるといふやうな庵相な事がある物かいな。其刀こつちへど、取りにかゝるを突放し、イヤ身が刀から先に渡せ、エ、マア渡さぬとて取らずに置ふが、エ、此刀と、取にかゝるを續げざま、打てばはつしり鞘割て、思はず知らず一と刀。ア、ちめた。ヲ、ウ貢様、お前斬りなはつたな、アレイ〜と泣き叫ぶ。驛立てさせじと口に手を當て、見れば血汐に身は紅、ヨウヤ、、、南無三手が廻つたか、モウ百年目と又ずつかり、斬られながらに逃げ行くを髻掴んで引き戻し、肋骨をぐつと一とゑぐり、其儘息は絶え果てたり。



14

向島其角住家の段

中

竹本 鶴澤 鶴澤 豊澤 豊澤 胡弓 鶴澤

雛太 寛治 友衛 呂太 仙糸 友三 郎

人形役割割

奴角 平 桐竹紋太郎

下女 おすみ 吉田榮三郎

大高源吾 吉田光之助

宗匠 其角 桐竹政龜

落合 其月 吉田玉助

西亭作詞並作曲  
大塚克三舞臺裝置

土屋主税

向島其角の住家の段  
土屋主税邸の段

(床本) 向島其角住家の段

武藏野に流れよどみも隅田川只一筋を雪の原、唯が言問はん訪れも、まれな三圍り向島、風雅を偲ぶ簗戸前裁雪持ち笹もひなびたる、住居は誰そと其角が内、返事待つ間を角平が、手酌の酒にほる機嫌、一口ぐつと

「ア、いゝ氣持ちだな、こゝん旦那はまん丸な、和尙とやら、宗匠とやら、イヤまた發句とやら法華とやら、堅くな様でやわらかで、花よ雪よとひねくれども、ちつともわからぬ珍文かん、こちとらにや花より團子、雪より酒が楽しみだ……おつと……こぼれる、ヤこぼれます。と、

一人舌鼓盃も下に奥の間下女おすみ勝手口より立出でて

土屋主税邸の段

竹本相生太夫  
野澤吉五郎  
前ツレ 鶴澤叶太郎  
後ツレ 鶴澤友二郎  
琴 鶴澤綱延

人形役割

土屋主税 吉田榮三  
侍女お園 吉田文五郎  
宗匠其角 桐竹政龜  
落合其月 吉田玉助  
大高原吾 吉田光之助  
若侍 吉田兵次

「コレ角平さん、返事の出来る其間、ちとの間まつて下  
さんせ、一人上戸で相手もなし、淋しかるふが我慢し  
て、氣のすむ程に吞まじやんせ、コレいくら吞もふと  
氣づかひない、酒はお弟子の誰れかれより、あちらも  
三升、こちらも師匠、その中々子葉さん、國は播州、  
清十郎お夏、戀の相生上銘酒、いもり酒ほど氣もとろ  
り、しんとろりの、酔心地且那の心のこの丁子、十分  
すごして下さんせ、肴はわたしが手造りながら、たこ  
の田樂、如何じゃえ。」

「こいつアまたよつぽどかつちけねえ、アハ、、、  
こふ言ふと御世辭の様だが、この且那は宗匠とやら後  
生安樂に、多くの人にかしづき立てられる程あつて氣  
の付く事の勿體ねえ、こちとらの口にや一生どころか  
しづくも吞めねえこの銘酒、五兩に二分の奴めにや、  
しんとろりとの相生は、相生傘より有難えや、其上  
たこの田樂とは、わしの目からはコレおすみさん、天  
女の方に美しい、お前の様な女房と、何處の山の奥で  
など、苦勞するのものとやせん。」

「エ、この人わいな。義太夫もどきでよい氣嫌、そろ



そんなら必ず角平さん、これは寢酒じやとつくりと猶温まつたがよいわいな、ナイ〜〜〜合點有難えとすみが心の隅田川徳利ぶら〜表の方。

「ちよきで歸るは夕べの名残り招く柳が氣にかゝる。

鼻歌まじりに角平は、風にふら〜奴胤、屋敷に主の松坂町本所をさして

「おつと角平さんあぶないぞえ。

「心配御無用、へん江戸つ子だ。

と、へらず口、別れてこそは歸り行く。

君が名の淺野と言へど淺からぬ、恩義も重き大高源吾今日を名残りの我心を人は何とも白妙の、忠義の道を一筋に、昨日に變る衣紋つき、大小さすが立派げに、其角が庵の門の口、それと見つけて下女おすみ、

「これは〜お珍らしい、子葉様ではござりませぬか、

よふまあお出で遊ばしました。

と挨拶すればこなたも又、

「おすみどのか此中は無沙汰申す、宗匠は御在宅かな。

「ハイ、今日はお出なされず、先き程も旦那さま、貴方のおうわさ申されて居られました。

「それは幸ひ、然らば子葉まいつたとお傳へ下され  
「ハイ。

畏つたと下女おすみ、一間へ立つて入りにける。それと知らせに主其角、茶立口より出でむかへ、

「これは久しや源吾殿、この雪道をよくぞお運び、サ、先づこれ〜

と他事もなき、主の詞に源吾も辭儀、然らばお容し下されと雪ふり拂ひ座敷の上、お寒かるふと下女おすみ、火鉢よお茶よともてなしの、其角も俱に打とけ顔、

「何と子葉殿、お寒い事のふ、年寄るとはや〜くたい、火鉢はこよなきよき伴侶、お寒かるふに、サ、御貴殿もお手かざされい。

「イヤ宗匠、お氣づかひ下されまするな、雪中歩行に血氣の我等、却て温かさへ覺え申す、これへ參る隅田堤雪の風情もまた格別、宗匠にも此雪景、何かお催しても御座りませふ。

「されば愚輩もそれと存じましたが、今宵都文公よりの御召にて、是非にそれ〜伺はねばならず、それ故催しは見合せました。

「ナニ都文公と仰せらるゝは。

「御貴殿も御承知あらるゝ筈じや、以前御同輩の勝田新左衛門殿の妹御、お園どのゝ御奉公先き。

「すりや吉良殿のお隣り屋敷の。

「如何にも御本家は常州土浦の御城主土佐守様、その御舍弟の土屋主税殿、ことの外の發句好きにて、俳名を都文公と仰せらるゝ。

と何氣なき詞の端も胸にこたゆる大高源吾、今宵と決まる敵の身に、もしやつながる事もやと高呼子心押しづめ「フムしてその土浦侯のお召しとは變つた趣向の御催しでも、

「イヤ／＼として趣向といふ程でも御座らぬ、今宵隣家の吉良家より年忘れの雪の茶會とて、お招きありし由なれど、日頃好まれぬ上野殿とて、たつと申すをお斷り申し、土浦侯には雪の句會、其角是非にとお召しでござる。どふじや子葉殿、句友に上下はござらぬ、御引合せ仕るふ、貴殿も御同道召されぬかの。

と聞いて安堵の胸なで下ろし、

「左様にござつたが、イヤ折角の御芳志是非に御供と

申したけれど、残念ながら今日は、ちと外に所用もござらばまたの機會に御願ひ申します、それにつき話もござれど、まづ何がなもと持參の瓢お開きなされて下され。

と腰につけたる手訓れの一瓢、取り出す心の中ぐもり、紐も染いろ紫に變らぬ艶もたしなめの人の心の床しけれ

(以下略)

### (床本) 土屋主税邸の段

早入相も暮れ過ぎて、本所土屋が奥座敷、雪も小やみの庭の面、石燈籠に油火の影もほのかにたゞよへる風雅を誰れか松の雪、

「雪の降る夜は一入淋し、心細くも燈火更けて、いとどたへ入る胸の内、物や思ふと問ふ人あらばせめて語りて慰まん。

琴の調べも合の間の襖押明け土屋主税、しとねの上に打ち寛ろぎ、

「その、物思ひげなる今の歌、又兄の事案じてじやの、心配致すでないわさ、痛はしや内匠殿無念に此世を去

られしかど、城代大石内藏之助、これあるからは思慮分別のあるべき筈、それに連らなる浪士の面々、そちの兄を始めとして、やがて名の出る事もあるふ。武士は即ち相見互ひ、そちを斯く世話いたすのも土屋も聊か義を知る武士、この詞に相違なくば予も後日には世の衰め者、心の痛みは身の毒ぢや、心配せずとサ、一盃呑め。

と情けの詞に、そのは只有難涙に手をつかへ、

「お情け深き其仰せ、御詞通りにござりますれば、園とてもどの様に、嬉しい事が存じませねど、もし御詞に相違もあらば御前様に此そのが、合せる顔もござりませぬ。

「ハ、ハ、ハ、またしてもいらざる苦勞、萬が一にも赤穂の者共、義を知らぬ曉にはコリヤその、そちよりはこの主税、予もまた世間の笑はれもの、白面に居られよか、公儀のお役も引かねばならぬ。

「すりやそれ程までにお心入れを、

「つながらる縁じや、是非がないわさ。

「ハツア有難ふござります。

と袖に涙の玉あられ、つゝみかねたる嬉し泣き、折ふし近侍兩手をつき、

「ハ、ア申上げます、只今寶井其角殿伺候いたされてござります。

「ナニ其角が参りしとな待ちかねしとくこれへと申せ。ハ、ア畏つて若侍立つ間程なく寶井其角端居にハツと兩手をつき、

「お召しによつて其角参上、思はぬ遅刻平に御赦し願ひます。

「ウム其角待ちかねしぞ、近ふ〜。

左様ならばおゆるしと座を立ち進めば土屋主税、

「どふじや其角、近頃無き此大雪、さぞ名句も出たであらふ。

「恐れながら御前様、發句どころでは御座りませぬ、もふ〜今日程、胸の悪い日はあつたものではござりませぬ。

「ホ、ウいつになきその氣色何がその様に氣に入らぬの「されば、それにつき御前様へ手前一ツの御願ひ事、と園を尻目に其角老人猶すり寄れば、

「ハテ改まつて願ひとは。

「ハイ外でもござりませぬ、爰にゐるその殿にお暇が願ひたい

と詞にびつくり驚くその、

「其角さまそりや何で

どう云ふ譯とおろく、驛、土屋も不審の眉を寄せ、

「そのに暇くれい、とは兄勝田新左衛門より左様な事申して参りしか。

「イエ、兄よりではムリませぬ。

「然らば何故暇を乞ふのじゃ。

「ハイ、私めの氣に入りませぬ。

「ナンじゃ、そちの氣に入らぬとな、ハ、、、、こりや又奇態、餘人は知らず、其角、そちはこのそのが親代りではないかの。

「ハイ、親代りの私故、なほお暇を願ふのでござりますと直ぐなる老の一徹もそれと知らねばなほ不審、

「益々もつて不思議な事、其角、そちや今宵どふかして居るの、圍、取り敢へず盃取らせ。

「ハイと返事も不安げに、取りつぐ盃受けながら、わざと

詞も卒化なく、

「イヤおその殿のお酌は受けぬ。

手前勝手に頂くと己が手酌にぐつとほす、様子見て取り土屋主税、

「ハ、、、、こりや面白い、其角いよくそちやどうかいたして居るの。

「ハイ、いたして居りますく、が致し様が変わります、御前全體赤穂の浪人は腰抜け者でござります。それにつながらるその殿ゆえ、お酌受けるもけがらはない。

「コリヤく、其角、是までそちは誰れよりも、赤穂の浪士をひいき致したでないか。

「仰せの通り昔は昔、今日と云ふ今日愛想が盡きましたいやはや沙汰の限りのなまくら武士。

と言はれておそのは口惜し涙、そりや又何でどふした事譯が聞きたい其角様、譯を話して聞かしてと縄り歎けば其角老、

「譯を話すもむやくしい、赤穂浪士の其中でも大高源吾と申す者、彼れとは久しい交りなれど、今日限り交りを絶ちました。

「フム今申す大高源吾とは、子葉の事か。

「御意にござりまする。

「これは扱、子葉は子葉、そのはその、たとへ源吾がどふあろうと、心の清きこの隅に、何のところがあろふぞや。

「サそこでござります。園殿には氣の毒ながら、兄の勝手と大高とは同輩と云ひ水魚の友、牛は牛連れと申すからは言はずと知れた腐れ根性。

と云はれておそのはせき立ちながら、様子知らねばもしやそも兄に過ちありもやと、思ふ内にも悔しさの聲かみしめて忍び泣き、ほんに思へば大高様、また兄さんも聞えませぬ、如何なる事の科かはしらず、人に笑はれ、そしらるゝ身もちはずに遊ばせしか、貴方斗りか御家中を皆悪名にうたはるゝがわしや口惜しい情けない、コレナア申し其角様、如何な仔細か知らねども兄は兄私は私一旦の御奉公お情け深き殿様の御とがめもなき其中は死すとも屋敷は放れませぬ、コレ申し御前様、お口添へると斗りにて涙にしめる袖袂しぼる斗りの口説泣き、不憫と思へど今更に老木のかたく押へかね

「そこ許には氣の毒ながら、不忠者の妹御をお手許近く差し上げては、わしも世間へ顔向けならぬ、因果と思ひあきらめて、サ早やお暇を願ふて下され。

「エ、いやぢや〜いやでござります

「これはしたり迷惑千萬サ、早ふ。

エ、イヤ、いや〜も女氣のすね木の松の下等何と其角も手持ち顔。  
(以下略)



得

# 九月の芝居御案内

京都四條 座南	道頓堀 座天辨	道頓堀 座角	道頓堀 座中	大阪 座伎舞歌
電話一五五一	電話二八七	電話二二二	電話一九七	電話二六八
二十日初日 演時四日毎開	一日初日 開二午正晝 演回時五夜	一日初日 開二午正晝 演回時五夜	一日初日 開二午正晝 演回時五夜	一日初日 開二午正晝 演回時五夜
京都初出演 前進座	花形歌舞伎 日曜祭日 午前十一時開幕	東厚劇團新生劇 合同劇	松竹家庭劇 二年振り歸座公演	日本二大仇討の上演 九月興行大歌舞伎 久し振りの 珍らしい大芝居
③ 元祿忠臣藏 ② 歌八番ノ内毛 ① 野の聲	④ 京人あ生 ③ 人情ふ寫 ② 話呼み朝 ① 子八日景記 形鳥景記	④ 出煙生三味線 ③ 煙る生三味線 ② 怪談壯丹の籠 ① 山鳩の燈宿	④ 風軍結國の車 ③ 軍國の母 ② 結婚の代記 ① 鬘ヒノマル軒	④ 元祿忠臣藏 ③ 高橋右衛門 ② 不破敦右衛門 ① 南基盤太平日記 夜の部通し狂言 伊賀越道中双六 四幕十場 書頭合娘 書試合娘 野の仇討津
一等席 三圓 二等席 二圓九角 三等席 一圓九角 四等席 一圓 五等席 五角 觀覽料 五十錢	椅子席 七十七錢 平場 七十七錢 一等席 一圓七十九錢 (入場税別)	特等席 二圓二十五錢 一等席 一圓七十五錢 二等席 一圓七十五錢 三等席 一圓七十五錢 四等席 七十五錢 觀覽料 五十錢 (入場税別)	特等席 二圓二十錢 一等席 一圓七十錢 二等席 一圓七十錢 三等席 一圓七十錢 四等席 七十錢 觀覽料 五十錢 (入場税別)	櫻席 八十六錢 菊席 八十錢 一等席 一圓二十錢 二等席 一圓二十錢 三等席 一圓二十錢 四等席 二十錢 觀覽料 十錢 平日一部御覽料 (入場税別)

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

## 當文樂座は

既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場であります。

## 文樂座人形淨瑠璃は

嘗て大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様の御期待に背かね様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りまが尙御す氣付きの點は御客機の御聲として承りたく存じます。

## 御携帶品は

正面二階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

## 貴重品は

各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。お煙草は一階、二階廊下に喫煙室を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御速慮下さい。

## お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。賣店は二階東側と二階西側休憩所に御座ります。

## お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて寫眞撮影は絶対にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に結茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マーカーを付けて居りますから御用の節は御申付け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御速慮なく御注意の程お願ひいたします。

## 出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて補助めますから豫め御承願ひます。

## ◇皆様へ御案内◇

當座は此座皆様へのあらゆるサービス機關として

案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事になりました。御一報次第登上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式会社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十七年 九月 八日 申劇

大阪市南區久左衛門町八番地

昭和十七年 九月 十日 發行 豊行所 松竹株式会社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八番地  
松竹株式会社大阪支店内  
發行人 鳥江 鏡也

大阪市西區土佐堀一丁目十二番地  
印刷所 永井日英堂印刷所

一部 金二十錢

